

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1567

王もその他の人々も、愛執を離れることができずに、死におもむく。なにかが欠けているかのように不満足なまま、空しく肉体をすてる。
（仏弟子・ラッタパータ）

△解説▽愛執とは、根源的な欲望で、喉の渴いた人が水を求めるような激しさにたとえる。もう十分という満足がない。富を得たものはさらに得ようと、王は大地を征服し海に向こうまで得ようとす。自分が見失われている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.2 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1566

もしもこのころの安定を失っているならば、国々を歩き回るのに何の用があるのか。それ故に放漫を抑えて、心が乱されることなく、瞑想せよ。
（『デーラガター』）

△解説▽「国々を歩き回る」（遊行）とは、初期の仏教では一つの修行形式であった。しかし、形式だけ守ってところが乱れていては、正しい修行ではない。何が大切か。視点がずれてしまう過ちを犯すものへのアドバイスである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.1 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1569

もろもろの法が明らかになるとき、彼のすべての疑惑は消える。すべてのものごとにはその原因があると了解するからである。
（『ウダーナ』）

△解説▽すべてが因縁によってなりたっている、縁つて起こっていると明らかに知るとき、その彼は智慧によって真相を見る。彼にとって、それまで見えていなかった障害が明らかにされ、気づき、取り除かれることになるだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.4 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1568

愚者は「死が近づいて」打たれた者のように、「死の床に」よこたわる。賢者は「死が」触るのを感じてもおびえない。ゆえに、智慧は財産よりもすぐれたものだ。
（仏弟子・ラッタパータ）

△解説▽人は死が近づいて慌て恐れる。教えを実践した賢者にも、死は訪れるがおびえない。そこに真実を見通している智慧があるかないかの違いがあるのだろう。智慧は何よりの財産だと教える。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.3 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1571

わたしがさだめ置いた、このよい行動様式を、あなたがたはさらに次々に後へ続けさせよ。わたしの「弟子の」あなたが最後の人になつてはならない。
(釈迦)

△解説▽苦しみを克服する智慧と実践を正しく継承していく。師から弟子へ、弟子は師となりまた弟子へと。その教えは大いなる流れとなり、そこに私たちが生かされる。そして、さらに未来へ伝えていきたい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.6 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1570

これら四つは、智慧の増大に作用する。四つとは何か。立派な人に親しむこと、正しい教えを聞くこと、注意深く思念すること、法に従つて実践することである。
(釈迦)

△解説▽智慧とは真実を見抜く洞察力。固定的な自己はなく、相互に関係しながらある自分を知ることでもある。自他の明確な区別はできないから、智慧は必然的に相手への慈しみの心を生む。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.5 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1573

学道の人、言を出さんとせん時は、三度顧みて、自利、利他のために利あるべければ是れを言うべし。利、無からん時は止まるべし。（『正法眼蔵随聞記』）

△解説▽道を学ぶ人は、ことばに出す前に、よく考えて自他の利益になる場合にのみ言うべきだ。ほめる、しかる、いずれにしても、発したことはにより影響や結果は正反対になることがあるから。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.8 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1572

天下の患は、其の然るを知らずして然るより大なるは莫し。
(蘇軾)

△解説▽この世で心配なことは多いが、その最も大きいのは、その原因をだれも気づかないこと。その間に状況がどんどん悪化していく。見る目をもって、物事の本質を見極め、なるべく早く正しく対処したい。的確に現状が生じた原因をありのままに知る鋭い洞察力が求められる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.7 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1575

すなわち政治的には民主政体が確立していても、他律的見解に対する寛容の精神のないところには、思想の自由が実現されない。
(中村元)

△解説▽もちろん、自らの主張をもつなと言うのではない。しかし、何々「主義」となって、凝り固まって、偏見をもって他を理解し、意見が異なったときに許す態度がなくなる、そこには、思想の自由はなくなってしまうだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.10 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1574

人人みな「自己」を生きねばならない。お前とわしとどちらが器量がいいか悪いか、そんなこと比べてみんかてええ。
(沢木興道)

△解説▽人は誰もが自分を生きなくてはならない。そんなとき、生きる基準を他人にあずけてしまい、人を気にして、人と比較して、落ち込んだり、喜んだりするというのは悲しい。心の主が自分になく、奪われてしまっている状態はよくない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.9 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1577

適宜に事をなし、忍耐をもつて努力する者は財を得る。誠実をつくして名声を得、何ものかを与えて交友を結ぶ。
(釈迦)

△解説▽仕事に従事して、困難なことにも忍耐をもって努力するならば財を得るし、その獲得の仕方が正しければ彼に名声が集まる。ただ、それだけではなく、得た財を必要に応じて与えるならば、そこに交友がうまれて良き友となるであろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.12 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1576

真理の獲得に役立つものは、励み努力することである。
(釈迦)

△解説▽「励み努力する」には、さらに、次のような徳目が必要になると教えている。すなわち、信が生じること、「師に」近づいていき、恭敬（尊敬）が生じること。耳を傾けて教えを聞き、その教えを保持し、考察して認めること。次に意欲が生じて、自ら実践し続けることであると。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.11 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1579

それら（貪欲や怒りなど）は愛執から起こり、自身から現れる。あたかもバナヤンの新しい若木が枝から生ずるようなものである。（釈迦）

△解説▽バナヤンとはニグロータ樹のことで太い枝のあちこちから気根を垂らして、地に届いたら太い幹になる。文献で譬えとして多用されるが、ここでは人の愛執にたとえ、つる草が林の中にはびこっていくようなものであるとする。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 15 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1578

世俗のことがらに触れても、その人の心が動揺せず、憂いなく、汚れを離れ、安穩であること、—これがこよなき幸せである。（釈迦）

△解説▽世間にはさまざまな出来事がおこる。ときには自分の心をかき乱し悩ませ、また、ときには喜ばし心地よくする。いずれにしても、動揺することなく平安を保つことが安穩であり、これは何よりの幸せであると述べる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 14 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1581

周囲のノボセにノボセ又この。雰囲気に酔わぬこと。これこそ智慧である。（沢木興道）

△解説▽人があつまり集団や党派ができる、時にはまひ状態が生じて、何がよいことか何が悪いかがわからなくなってしまう場合があると指摘する。そのときには智慧がはたらいていない。正しく気づくことができている。正しく気づくことができている。「さえもがわからなくなってしまう。」

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 17 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1580

勇ましい雰囲気の中にあって、そのマネして、勇ましいマネするならば、それは勇ましいのではない。（沢木興道）

△解説▽マネをしているならば、少なくともそのとき本人は勇ましく、それが自分の練習・向上にならなければよいが、そうでなく、人目を気にして、外見だけを見せかけているようなら、マネしているという点で本当の勇ましさからは遠く離れている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 16 中村元記念館協力